

ものである。此の言語で書いたものゝ断片は龜茲の境域のすべての地方から発見せらるゝが、それ以外の地方では発見せられたことを聞かない。しかし従来はこれで書いたものは皆佛教關係の文記のみであつたから、或は此の言語は佛教が他國から導き入れた宗教語であるかも知れないといふ疑があつた、然るに今此の如き諸處の卑賤な驛官等に宛てた通行免狀にもこれが用いられたとが明らかになつて見ると、此の疑は全く消れて、純粹な龜茲の國語であつたことは争ふ可らざる次第である』といふのである。(序に記しておくが、トカラ語の名稱については藝文第二年四號)の拙稿「漢譯の佛典に就いて」の四七—四八頁を参照ありたい。

次には此の龜茲語なるものが龜茲國に行はれた時代についての論に入つて居る。

『此等の通行免狀には日附けのあるのがあつて、一例を挙げると「二十年 *ksun* 第七月十四日」と記されてあり、全體の中には 1, 5, 6, 19, 20, 21 *ksun* の年數を認める。然るに庫車附近 Douldour-Agnor の一寺院から発見せられた計算書の断片にも 4, 5, 6 *ksun* の年及び *Saldirang* の木牌の同一の年が見ゆる、尙また Pelliot 氏は此の断片の中から、四メートル餘りの卷子の切れを発見した、それは此の寺院に關係した複雑な事件の記録であるが、その記載された事柄は 22, 23 *ksun* の年から直ちに 3 *ksun* の年に續いて居る。思ふに此等の年は、19, 20, 21, (22, 23) *ksun* が一續きで、其後に、1, (3), 4, 5, 6 *ksun* の一續が續くものであらう、たゞ此等の *ksun* なる語は、この特種の場合に用いられてある外には現はれない語である。さて此等の通行免狀によると、21 *ksun* 年に *Swarnate* なるものが大王 (*Oroce pilante*) の稱を用いてゐる、この *Swarnate* なるものは唐書に見ゆる唐の太宗と同時代の蘇伐疊 (*Sou-fa Tie*) で、慈恩傳に金花なる王の子で相續者と記されてあるものでなければならぬ。金花なる梵語の形は *Suvarṇapūṣpa* であらうが、此の名はペテログラードの人種博物館に保存されてある *Ber-*